

学・会・近・況 セッション企画4

19世紀後半から20世紀初頭の 地域社会における マールワリー・プレゼンス

中谷純江

本分科会は、2009－2011年度科学研究費（基盤C）「インド商業集団、マールワリーの研究」（研究代表者・中谷純江）による共同研究をもとに企画した。19世紀にインド各地に進出し、「マールワリー」として知られるようになったラージャスターン出身の商業集団を対象に、中谷純江、豊山亜希、小松久恵の3人がそれぞれ社会人類学、美術史、ヒンディー文学の立場からアプローチした。

まず趣旨説明で、分科会及び共同研究の目的を2つあげた。「マールワリー」を共通課題とするにあたり、特定の土地に帰属しない人々、移動を本質とする人々の視点から地域社会を捉えなおすことを第一の目的とした。南アジア研究の多くは、土地支配を議論の中心としてきたため、移動する人々の世界はあまり論じられてこなかった。マールワリーの出身地とされるラージャスターンにおいても、その歴史は支配者ラージプートの領土争いと王国興亡の歴史として描かれてきた。商人に焦点をあて、ラージャスターンや北インドや南アジアを理解する新たな視点を提供することをめざした。

第二に、19世紀後半から20世紀初頭の時期に焦点をあてることで、移住商人と彼らの「故郷」との関係を見ることを目的とした。これは、商人たちがラージャスターンの商業町を離れてインド各地に進出し、ビジネスに従事することを通してイギリスの植民地支配を支え、経済力を増してゆき、のちには国民会議派を資金的に支えるなど、国家的な影響力をもつまでに成長する時期である。この時期には、移住先で経済的成功をおさめつつも、その富の多くが故郷で消費されており、「故郷」との関係が物理的に保たれていた。言い換えれば、彼らのネットワークはラー

ジャスターンを中心に展開し、「故郷」との関係を軸に彼らの存在が理解されていた時期である。この時期にマールワリーは地域の人々の目にどのように映ったのか、また、地域社会に対し自らをどのように提示したのか理解しようとした。

第1報告は、中谷純江「故郷への投資—ディアスポラ商業集団、マールワリーの経済活動—」であった。分科会の最初の報告として、「マールワリー」を地理的に位置づける役割を果たした。マールワリー財閥や大企業家の名前を誰もが知っているにもかかわらず、イメージばかりが先行し、具体的にどの集団を指すのか、その定義はいまいである。先行研究では、商業移民(migrant traders)やディアスポラ商業集団(diasporic trading communities)と表現され、移住先における彼らの経済活動が議論の中心となってきた。一方、中谷は「マールワリー」を彼らの出身地であるラージャスターンの商業町を起点に捉える。これによって、地域社会の歴史を支配者と商人の関係を軸に描き出すことと、商業町との関係においてマールワリーを理解することを試みた。

中谷が調査地としたのは、著しい成功をおさめた商人を多く輩出しているシェーカーワティー地域のチュールーという町である。18世紀から19世紀半ばまでチュールーの中心的商人であったポードル家の事例をもとに、商人が本質的にモバイルであること、土地には固執せず、自らが支配者になろうとはしないこと、しかし、経済活動がスムーズに行えるよう権力者と親しい関係を保つよう尽力することを指摘し、納税、貢物、祭りの後援、融資といった様々な形の象徴的投資が支配者との関係を築くために行われていたことを明らかにした。次に、インド初の百万長者と語られるチュールーの豪商、バクワーンダース・バークラーの事例から、19世紀後半には、在地支配者よりもむしろイギリスとの関係をうまく築くことが経済的成功に重要となったことや、それに伴って商人による象徴的投資の形が変化したことを論じた。

19世期中頃まで、多くのマールワリー商人たちは経済活動の拠点をラージャスターン各地の商業町におき、そこに家族を残したまま、男性成員がビルマを含む北インド各地に滞在して商業活動に従事していた。当時「故郷」の商業町は、全インドにひろがる商業ネットワークの結節点であり、人材や資本を集め、利益を再配分するビジネス拠点の役割を

もっていた。しかし、20世紀になると家族全員がイギリス直轄地へ移住し、消費をふくめた経済活動の拠点自体が移された。単身から家族へとという移住パターンの変化は、マールワリーと「故郷」との関係を大きく変化させた。ラージャスターンの商業町に築かれた商人邸宅は居住者を失い、祭りや結婚式や葬式といった家族イベントの場となった。興味深いことに居住や商売の機能を失って以降、ますます邸宅は豪華になり、多額な投資がなされた。こうした20世紀以降の、自らが住むことを目的としない大邸宅の建設や実質的な成員でない町への寄付は、「故郷」とのつながりを地域社会の人々に対して顕示するものであり、そこが「故郷」であること自他ともに確認するためのものであったと、中谷は論じる。言い換えれば、象徴的投資を通して、ローカリティとの関係性を創り出す必要がマールワリーにはあった。なぜなら実質的な意味での先祖の土地などは、モバイルな彼らに存在しないためである。

1930年代以降、ラージャスターン商業町における邸宅建設は止み、移住第3世代になると「故郷」の商業町や邸宅を訪れる機会もほとんど失われた。その一方で、結婚や男児の切髪儀礼の際に、ラージャスターンにあるクラン女神の寺院を訪れる人が近年増えている。中谷はこうした変化について、マールワリーの「故郷」が「邸宅のある町」から、「クラン女神の祀られている寺院」へ変化したと論じる。また、コルカタ在住のある一族（クラン）は、数年前に彼らのクラン女神をラージャスターンからコルカタへと移した。このため、このクランの人々はもはや人生儀礼の際にラージャスターンを訪れる必要がない。言い換えれば、コルカタが彼らの「故郷」となっており、移住先にクラン女神を移設するこの事例は、移動商人が「故郷」を新たに創造する新しい方法として理解できる。定住者にとって、故郷とは具体的な土地との関係に由来するのに対し、移動商人はこれまでも様々な投資によって「故郷」との関係を意識的に創り出してきたと中谷は結論する。

第2報告は、豊山亜希「ハヴェーリーからみたマールワリーと『故郷』のローカル社会の関係性一視点・表象・伝統をめぐって―」であった。美術史を専攻する豊山は、マールワリーがラージャスターンの故郷に建築した邸宅（ハヴェーリー）の壁画を取り上げた。共同研究の目的に照らしていえば、第一にハヴェーリー装飾をマールワリーの観点から再評価す

ること、第二に、壁画装飾のイメージソースや表現形式や材料の分析から、マールワリー世界の一端を明らかにする試みといえる。

シェーカーワティー地域には、マールワリーを施主として1830年代から1930年代の約100年間に造られ、彩色壁画が施された建物が多く残されている。近年注目をあつめている商人邸宅の彩色装飾について、先行研究は壁画の主題（何を描くか）にマールワリーのアイデンティティが投影されているとの前提にたち、神話のシーンや祭りや動植物といった「伝統的主題」と、近代技術や西洋風の生活様式などの「近代的主題」との混交について、マールワリーのコスモポリタンな自己表象、あるいは伝統と近代の間で揺れるアイデンティティの顕れとみなしてきた。これに対し、豊山は壁画の主題が伝統か近代かという区別は、マールワリーのアイデンティティを十分に説明していないとする。なぜなら伝統的主題が描かれていても、表現形式をみれば、19世紀の都市で流行した写真や大衆絵画や版画の影響を強く受けていることがわかる。カルカッタの大衆美術やカンパニー画といった、植民地インドで新たに生まれた視覚文化の影響が伝統的主題にも確実に埋め込まれており、植民地近代という視点を抜きにマールワリーのアイデンティティを単純化して語ることはできないと論じる。

また、豊山は植民地の文化行政によるハヴェーリー建築の評価を再考する。伝統文化復興の潮流において、19世紀後半までにラージャスターンの建築や工芸品は「土着伝統」として高く評価され、復興再編された。この時期のマールワリーは、シェーカーワティー地方における「素晴らしい旧来の伝統的意匠」の保持に貢献する存在として描かれていた。しかし、20世紀になると評価は一転し、彼らが造営した建築物は悪趣味なものとして批判され、ハヴェーリー壁画は「伝統」の衰退と言われる。その原因として、人工顔料の普及や同時代の西洋的画風の印刷画を壁画にそのまま写すことが流行したことがある。しかし、豊山は量産的な印刷画の模倣を地域文化の想像力の衰退とする見解を安易すぎると論じる。なぜなら、ハヴェーリー壁画はそもそも植民地近代に再編されたインドの「伝統」を表象しており、カーリーガート画やバツタラ版画、カンパニー画といった視覚文化の先に登場した、西洋画風の印刷画をイメージソースとすることは当然の帰結である。それが批判されるのは、「近代」に対する「伝統」という関係性が脅かされることへの植民

地権力の危機感の表れである。もはやマールワリーは産業資本家として国家レベルで存在感を高め、イギリス資本を脅かすようになりつつあった。

また、「衰退期」に造営、あるいは修復されたハヴェーリーは先行研究で取り上げられることがなかった。しかし、現地調査からかなりの数が存在し、それらのハヴェーリーの多くに、特徴的な装飾材料として文様タイルが用いられている点に豊山は注目する。ヴィクトリア期にイギリスで量産されたタイルの一種であるが、ハヴェーリーに用いられたタイルの多くは、デザインの特徴から明治期に日本で製作されていることが明らかになる。日本のタイルメーカーには、インドから特注で組絵タイルの注文をうけた記録も残されていた。イギリスからもたらされたタイルが日本で国産化され、イギリスで印刷された西洋画風の宗教画をイメージソースとした組絵タイルが、インド人資本家によって日本のメーカに特注生産され、その邸宅を飾るという一連の流れを、豊山は西洋近代というヘゲモニーが凌駕されていく過程として読み解く。和製タイルをマールワリーが積極的に邸宅の装飾に採用した背景には、ナショナルなアイデンティティを超えた汎アジア地域アイデンティティの表出を見ることができ、マールワリー自身も含めたハヴェーリー壁画の再解釈の必要性が指摘された。

第3報告は、小松久恵「質実剛健 or 享楽豪奢—1920年代北インドにおけるマールワリー・イメージをめぐる一考察—」であった。小松は、20世紀初頭に北インドで発刊されたヒンディー語雑誌の「マールワリー特集」を題材に、移住者マールワリーに対する北インドのエリートのみならずについて論じる。地域社会におけるマールワリー・イメージが、一方では著名なマールワリー商人の自伝や日記において質実剛健な姿をとり、他方では、特集に描かれた享楽豪奢な姿をとることについて、これら自己表象と他者表象の齟齬がどのような時代背景の下に生じたのかを明らかにしようとした。

小松が分析したヒンディー語雑誌『チャンド』は、北インドのミドルクラスの間に普及していた人気雑誌で、1922年に女性の地位向上を目標に掲げて創刊された。徐々に社会問題全般へ、そして政治問題を扱うようになり、1920年代後半には反英方針を明確にうちだすようになっ

た。マールワリー特集号は1929年11月号に掲載され、紙面の大部分が都市部に移住した裕福な商人夫妻への批判に割かれた。因習の固持や教育の欠如、享樂的態度、性モラルの乱れなどが扇情的な文章と大量の風刺画によって描き出された。刊行前から出版反対運動がカルカッタのマールワリー商業協会を中心に展開され、チャーンド誌に原稿や写真を提供した協会員に返却を求めるよう呼びかけがなされた。にもかかわらず特集号が刊行されると、協会は排斥運動を展開し、G・D・ビルラーはガンディーやベンガル総督をも巻き込んで、出版差し止めの助言を求めたとされる。当時の新聞や雑誌には特集号に対する反論、反論への反論がその後数年に渡って掲載されつづけ、1933年には編集長が引責を余儀なくされた。

悪名高き「マールワリー特集」は、ジャーティの社会改革を促進する目的で発行されたとされ、先行研究はコミュニティ内部の改革派と保守派の対立を表す例とみなす。一方小松は、表象をめぐる書き手と対象の関係を近代対伝統という二項対立図式で理解することはできないという。観察者の存在、田舎者の商人夫妻の行動に眉をひそめ、嘲笑する人々の存在が風刺画に描き込まれていることを指摘し、マールワリーはこれら都市エリートにとっての、二重のスケープゴートの役割を担わされたと小松は論じる。第一に、マールワリーはインドを後進性とむすびつける植民者のインドイメージを背負わされ、野蛮であるのはマールワリーでありインド全体でないという言説を成立させるために利用された。第二に、墮落した西洋文化を体現する存在として、「ヒンドゥー理想像」に反する集団として非難された。小松は、マールワリー社会のマイナス面ばかりに目を向けるのは、『マザーインディア』でメイヨーが植民地統治を正当化するためにインドの後進性ばかりを取り上げた図式と同じであるとし、マールワリーに対する北インドエリートの視点は、インドを「他者」として表象した植民者のそれに重なりと論じる。

こうした背景には、ラージャスターンからの家族を伴った移住者が増え、都市部においてマールワリーが急速に存在感を増しつつあった社会状況がある。近代ナショナリストとして自らを位置づけるために、マールワリーを他者として表象した北インドエリートのアイデンティティのあり様を見ることができる。逆に、マールワリーにとっては、一方的に貼りつけられた偏見、西洋かぶれの享樂豪奢な商人という「植民地

権力の共犯者」イメージの否定が、ガンディーを支持し独立運動を支える質実剛健なナショナリストというアイデンティティをより強化することになったと考えられる。

以上の報告に対して、分科会では都市についての人類学的研究の立場から三尾稔氏に、近代ベンガル経済史研究の立場から神田さやこ氏にコメントをいただいた。マールワリーを一枚岩的に捉えることの問題点や、コミュニティ、カースト、企業体、家族のどのレベルでマールワリーを捉えるかを明確にする必要性、コミュニティと個人の関係の時代的变化を見なければならない点など、非常に有益な指摘がなされた。本稿は、コメントを受けて、その後の研究の展開をも含めた成果報告である。

なかたに すみえ ●鹿児島大学国際連携推進センター准教授